昭和二十四年七月二十三日第三種郵便物認可
昭和四十七年八月十五日発行（毎月一回・十五日発行）
（通第二七九号）

慈光

第二十四巻　第八号

目次

慚愧心……近角常観……(1)
盂蘭盆の感想……福島政雄……(8)
道は邇きにあり……山本晋道……(10)
念仏詩抄……木村無相……(16)
親鸞一人が為なりけり……花田正夫……(18)

慚愧心

近角常観

（求道学舎日曜講話）

今日の題は慚愧心と出して置きました。慚愧心とは自己の罪深きを中心より慚愧する心で、世に慚愧ほどありがたい心はありませぬ。自分の罪深きをば自分より眺めて、これを天に慚じ地に愧じ人に恥じ自分に恥じ、自から語り人に話して自分の罪ふかきを恥ずる心がすなわち慚愧であります。つまり自己の罪悪をばはじめて自分に知り、身のおきどころなく恥じる心であります。

ところが親鸞聖人はこの慚愧の上にさらに何と云われているかというに、聖人は自分は無慚無愧の者である、慚愧することさえ知らぬ浅間しき親鸞であると仰せられてあるのです。すでに慚愧が自分の罪深きに身のおきどころなく悲しむ心である。しかるにその慚愧さえ出来ぬ無慚無愧の親鸞であると聖人は悲歎せられているのです。

ここで慚愧と無慚無愧との味が実にありがたい。我々は自分の罪悪深重に気がつくならば一瞬といえども慚愧せずには居られぬはずである。しかるに実際はどうか、自分の「罪悪の深きことも知らず、如来の御恩の高きことをも知らず」無慚無愧の有様にてかえってこれを当然のように暮して居るのである。実に浅間しい限りであります。

さてこれを我々がお聞きすれば、親鸞聖人は無慚無愧であると慚愧せられたのである。自ら無慚無愧といわれるほど手ひどい慚愧をせられたのである、聖人のお言葉は実に慚愧の極点を示されたものであります。なお多少の御文を拝読して行けばさらによく解ることと思います。

無慚無愧のこの身にて　まことの心は無けれども
弥陀の廻向の御名なれば　功徳は十方にみちたもう

我々は実に無慚無愧、一点のまことも無き者である。自身を云えば何処に一点の取りどころもない。本来自分という考えが根本的に悪いのである。その悪くてとりどころのない者故にこれを慚愧せなければならぬはずである。それを愧じることを知らない、我々は飽くまで悪に悪を重ねているのである。実に我々は罪悪の極、無慚無愧であります。古人は慚愧の水をもって煩悩を洗うのであると申されたのに、我々はその慚愧の心がおこらず日夜に悪に悪を重

ねて居るのである。

私如きはご承知の通り「懺悔録」という書物まで出しました。悪を慚愧すべきであるのに無慚無愧に暮せるのみかなお懺悔という名をもってその無慚無愧を飾り立てようとするのである、実に勿体ないことであります。それを懺悔で洗わしてもらうのであります。中心から悪でかたまっている我等であります。自分は絶対的に悪ではないが、唯幾分悪があるなどと思うている間は、自分にとりどころがあると思うているためであります。

私は今年はじめから一寸風邪にかかりしばらく寝て居ました。風邪はすぐに快くなりましたがまだ咽喉が十分でありませんので引きこもっております。それについて自分で考えて見まするに、自分の職分を少しも全うすることが出来ない。ことに今年は何故か彼方此方と遠く信仰のご縁を結ばれている諸方面から、年の改まると共にいちじるしく反響の喜びがあらわれてくるのです。近頃の私の感じではあちらこちらと、或は内に或は外に、色々に信仰のご縁を結んだ諸方面へ仏陀のひかりが一時に響きわたって、春に花の咲くように、一時に仏の光を喜ばせてもらうように思われるのである。それほど仏陀の御光は力強くあらわれて下されてあるのに、自身を見ればどうであるか。風邪を一寸引いた、咽喉が悪いと早やたちまちに自分の勝手心を起して懈怠におちいっている。実に人間には一寸も頼むべき個所はない。心が善くなる、善くならぬどころの話ではないのです。あゝ今日にいたる十年間、私が信仰を喜ばせてもろうて以来、今年で丁度十年になる。その間信仰を喜んだために一点でも自分の心が善くなっているということはありませぬ、ことにこの両三年間は遠近諸方面にご縁を結ばせていただきまして、諸方面の方々もみな非常に喜んでいて下さるのであります。それにもかかわらず、この私の心のきたなさは昔も今も一寸の変りもありませぬ。悪く云えばむしろお慈悲に慣れてしもうて横着心が増したばかり、真に自分の状態を思うと無慚無愧、誠の心はちっとも無い者であります。

なお聖人の痛切な御慚愧はこの外の和讃においてもうかがうことが出来ます。一体「愚禿悲歎述懐和讃」十六首はすべてこのこころをもらされたものであります。しかもこの和讃が最も聖人ご老後の作でありますから、聖人は御老年になればなる程、いよいよ慚愧の情を強くお感じなされたようであります。今こころみにはじめ二三首を拝読してみましょう。

浄土真宗に帰すれども　真実の心はありがたし
虚仮不実のわが身にて　清浄の心もさらになし
身は浄土真宗に帰入してひさしく大悲の御恵みにあずか

って居ながらも、この我々の心中は何であろうか、飽くまで虚仮不実のかたまりで、清浄真実の心などは見たくても見えぬ、実に私共もこの通りであります。

外儀のすがたはひとごとに　賢善精進現ぜしむ
貪瞋邪偽おおきゆえ　奸詐ももはし身にみてり

我も人も表面には、賢善精進の相をよそおうているが、心の内面は貪瞋邪偽、奸詐百端にして、目もあてられぬ有様ではないか。表に賢善精進をよそおうだけいよいよ偽善に偽善を重ねているのである。

悪性更にやめがたし　こころは蛇蝎のごとくなり
修善も雑毒なるゆえに　虚仮の行とぞなづけたる

我々の心の有様は何事はない蛇である蝎である。しかもこの蛇蝎の心を慚愧する事を知らないのみか、あらゆる自力雑毒の修善をもってこれを覆い隠そうとして苦しんでいるのである。如何にも手厳しい和讃であります。

さてこのような罪悪の我々であれば、何によって安んずることが出来るか。今慚愧は罪悪を洗う水である。しかしながら我々は自分の罪悪を慚愧してそれで安心することが出来るかどうか。慚愧は罪悪の皮をめくるのである。しかしながら自らつとめて罪悪の皮をめくるならば、最後にいたるまで皮ばかりである。

ここに至っては最早や如何ともすることが出来ぬ、その如何ともなすべからざる者に向ってはじめて仏陀絶対の救済があるのです。

無慚無愧のこの身にて　まことの心はなけれども
弥陀の廻向の御名なれば　功徳は十方にみちたまう

で、実に絶対の廻向である、絶対他力の味はここにあるのである。我々がかくまで罪深く浅間しき者なればこそ、ここに弥陀廻向のみ名が用意されてあるのです。我々は自分には一点の廻向心もない、唯弥陀廻向の御力で、仏陀絶対の御恵み一つで救済にあずかることが出来るのである。仏陀はこの罪悪深重の我々に向って絶対の慈悲、絶対の哀れみを廻向して下さる、これが廻向である。

かくして我々に与えて下さるのが南無阿弥陀仏であります。南無阿弥陀仏、口にすればたった一言ではあるが、この中には一切の功徳、一切の恵みが皆籠ってある。阿弥陀仏は一切諸仏の本仏である、南無阿弥陀仏とは即ちその阿弥陀仏に帰命するのである、すがるのである、あこがるるのである、まかすのであります。その阿弥陀仏の絶対の御恵みに対し南無と一念帰命する、そこに仏あり我を摂取したもうのである。父と呼べば父あらわれ、母と呼べば母きたる、南無阿弥陀仏と呼び奉れば、仏これをききて我を摂取して下さるのであります。

弥陀の廻向のみ名なれば　功徳は十方にみち給う

と実にありがたい、はじめにも云うたように、自分をかえりみれば自分に一寸の取りどころも無いのである。

「自分の本心は悪では無いが、罪があるからいけない」などと云えば、何処かに善いところがある如く聞こえるがそんなごまかしは云うて居られぬ、我が身は無慚無愧、悪ばかりのこりかたまりである。その者なれども弥陀廻向の御名なれば、絶対の功徳をいただくことが出来るのであります。我々の罪悪も実に絶対大であるが、弥陀廻向の御力はそれにまさる大きさである。

願力無窮にましませば　罪業深重もおもからず
仏智無辺にましませば　散乱放逸も捨てられず

仏願きわまりなき故に、罪業深重の我をも重しとし給わでお救い下さるのであります。「我々は如何にも罪悪深重であるが、仏にまかせ奉れば我々は楽になるのである」とそんな気楽な事が出来れば実に結構であるが、我々は何処までも罪悪のかたまりである、どうしても罪を離るることの出来ぬ者であります。然しながらその浅間しき我々なれども、このたびは弥陀の願船に乗せていただけばこそ、かくまで苦しき罪ありながら、その苦しみが苦しみとならず重きが重きとならで助かるのである、無慚無愧のこの身にて、誠の心は無けれども、弥陀の廻向の御名なれば、功徳は十方にみちたもうて下さるのであります。

さてかくなって来てここが大事である。前々より云うように、わが身は実に無慚無愧、罪業深重の骨頂ではあるが弥陀の廻向の御名なればと、一念、仏の大慈悲に気がつくに及んで、ここにはじめて真実の慚愧心があらわれて来るのであります。今まではどんなにつとめても出て来なかった慚愧心が、今は大悲の御恵みで自然に溢れて下さるのであります。自分が苦しんでいる時には誰でも自分を省みる心はおこらぬが、楽になれば、さてと深く省みる心が動く。それと同じく今は仏陀の御恵みで、御名のお力で、ああ実に罪悪深重の浅間しきわが身であったと、はじめて解らせて頂くことが出来るのであります。

「弥陀廻向の御名なれば、功徳は十方にみち給う」と、絶対の恵みより廻施したまわる功徳は無碍である、或は感謝の喜びとなり、或は慚愧の情にうたしめたもう、何もかもみな仏の御恵みよりたまわるのである。実に六字、南無阿弥陀仏より光被したまわる功徳は尽十方界に遍満していて下されて、はかり知ることは出来ませぬ。

又、同じ和讃にのたまわく

小慈小悲も無き身にて　有情利益はおもうまじ
如来の願船いまさずば　苦海をいかでか渡るべき

今日の思想界には理想であるとか、人道であるとか、慈

善博愛等の叫びが段々と盛んになってきて、今やこれらの声の下に人々は悲常な渇仰をもって集っている。無論これは決して悪くはない、むしろ大いに慶すべき現象であります。が、さて我々は真実にこれを実行することが出来るかどうかというのに、否、本当のことはいつも出来ていないのである。それはどうかというに、我々の慈悲、同情なるものは中心よりして真実に出来るものではない。歎異抄の第四章には

慈悲に聖道、浄土のかわりめあり、聖道の慈悲というはものをあわれみ、かなしみ、はぐくむなり、しかれども思うがごとくたすけとぐること極めてありがたし。

と、我々人間の力をもってしては思うように慈悲を行うなどは到底出来ぬのであります。我々が慈善を行おうと思う時にすでに慈悲は無くなっている。慈善とか慈悲を行わんと思う心すでに「我は善を為せり」という自分の心をば満足させんがために慈善とか慈悲を道具に使っているのである。

我々は真に小慈小悲も無き者であります。早い話が、我々は真実に敵を愛することが出来るか、仇をとがめぬことが出来るかどうか、私にはどうしても出来ないのである。或は金銭をもって名誉にかえることは出来るかも知れぬ、余力を貸して高慢心を満足さすことは出来るかも知れぬ。けれども身を捨てて人の為にする、敵を愛するいうことはどうあっても為し能わぬのであります。いな敵をとがめぬ丈け、或は敵に物を与えるだけならばなお或は出来るかも知れぬ、併しながら敵を許すという一事は何事があっても決して〳〵出来ぬのであります。もしこれが出来ると思う人があればその人は余程自分を偉いと思うて居られる人である。親鸞聖人は「小慈小悲もなき身にて、有情利益は思うまじ」と告白せられました。

私は日曜毎に諸君とお話して居りますが、私一身より申せば決してお話などの出来る私ではありませぬ。無慚無愧小慈小悲も無き身でありながら人を利するなどと思いもかなわぬ事であります。しかしその次に「如来の願船いまさずば、苦海をいかでか渡るべき」かかる浅間しき世、かかる浅間しきわれらのために、ここに如来の願船が居て下されたのであります。若しこの船ましまさずば我々は苦海をいかでか渡るべき、永久に苦しき人生を脱却する期は無かったのである、小慈小悲もない我々、もとより有情利益など思いも及ばぬ我々である。しかるにここに如来本願のみ船が待ち受けて居て下された。歎異抄の続きに

また浄土の慈悲というは念仏していそぎ仏になりて、大慈大悲心をもて思うが如く衆生を利益するをいうべき

なり

とある。如来の願船ここにあり、南無阿弥陀仏を唱念して、この願船に救われ彼土に到りて美しき仏としていただいた時、はじめて真実の大慈大悲を行うことも出来るのであります。昔は竜樹菩薩がこの味わいをば難行道、易行道とお分けなされて

世間の道に難あり易あり。陸路の歩行は則ち苦しく、水道の乗船は則ち楽しきが如し、菩薩の道もまた是のごとし。

と示された。我々の耳には十分慣れきっているから左程にも感じぬが、中々ありがたい御文である。小慈小悲も無き身をもって慈悲善根を行じ、種々と理想を実現して行こうとするのは難行道、陸路の歩行である。そんなことはとても出来ませぬ。小慈小悲もない身をもって歩ける歩けぬもない話である。いつもよく言う御文であるが、聖人の仰せはどうであるか。教行信証の信の巻に、

一切の群生海、無始よりこのかた乃至今日今時にいたるまで、穢悪汚染にして清浄の心なし、虚仮諂偽にして真実の心なし

今日今時、即今只今がすでに罪悪のかたまりである。しかれば到底陸路を行く事は出来ない我々であります。ところで慶ばしい哉、ここに如来の願船がいて下された、水道の乗船が楽しき如く、此の願船に乗ずれば、自分ではかわらぬけれども、善きに引き連れて下さる。この願船に乗るなりたちまちおたすけ下さるのであります。しかもこの願船に乗托すればここに広大の恵みがあらわれて下さるのであります。しかしながらそのために我々の罪業が一厘でも善くなるのではない。我はあくまでも昔の無慚無愧の罪体なのであります。さりながらその無慚無愧の憐むべき我なれども、仏はこれを広大なる願船の御力をもって救い取って下さるのである。かくて仏陀の御恵みにて自然と慚愧の情をも起さしめて下さるのであります。

数日前も筆を執って彼の耳四郎の実例を味わせて頂きました。話の筋はすでに諸君が御存じでもあり、又外にも記しましたから略しますがこの耳四郎の一例でも味わい方一つで大なる間違いを生ずることになります。昔からこれを何と読んで居ったかと言うに、念仏はして居ても、信仰は得て居てもなお性来の悪業は止まぬものと見て居ったのである。これは頗る浅薄な見方と申さねばなりませぬ。耳四郎の味わいは其処ではない。耳四郎の如き大悪人なれども念仏せるためにその悪人が一命をたすかるのみか、遂に性来の悪事は断たれ、それのみならず、その五逆十悪の耳四郎に南無阿弥陀仏の六字がお宿り下され、遂には大願海の中へ救い取られたというところが要点なのであります。

小慈小悲も無き身にて、有情利益は思うまじ
如来の願船いまさずば、苦海をいかでか渡るべき

如来の願船いまさずば如何にして五逆十悪の耳四郎が苦海を離れることが出来ましょう。それにつきて私は思います。覚如上人は耳四郎の物語に附記して、

今時の道俗、誰のともがらかこれにかわるところあらんや。この身においては三毒をたたえ、外に十悪を行ず、造るに強弱ありといえども、三業みなこれ造罪なり犯すに浅深ありといえども一切ことごとくこれ妄念なり。しかれば誰のともがらか罪悪生死の名をまぬかれん。何れの類か煩悩成就の体にあらざらん。造るも造らざるもみな罪体なり、思うも思わざるもことごとく妄念なり、云々（拾遺古徳伝）

と。私は思う、我々は耳四郎を強盗と云っているが、仏の御目から御覧なさる時は、我々も耳四郎もすこしの相違もない。これは法律上の罪人、これは宗教上の罪人と、仏の前にはそんな区別はない、一切すべて罪である。形のあるなしにかかわらぬのみならず、思うも思わざるもことごとくこれ妄念なのである。所謂、人生のすべて、道徳の有無等にかかわらず、すべてが皆罪体なのであります。

しかるにその罪体の我等なれども今度は弥陀の願船に乗じ南無阿弥陀仏のお恵みにより心底より安心させて頂くのである。如来の願船いまさずば、苦海をいかでか渡るべき唯仏陀の御慈悲、この外に何事もないのであります。

聖人のお言葉は晩年になればなる程、いよいよ強く出て居るようにうかがわれる。和讃の一番最後に

よしあしの文字をも知らぬ人はみな
まことの心なりけるを
善悪の字しりかおは　おおそらごとのかたちなり
是非しらず、邪正もわかぬこの身なり

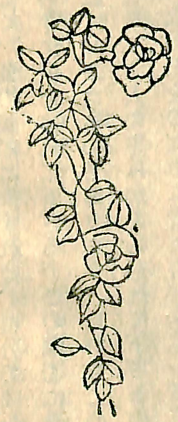
小慈小悲もなけれども名利に人師このむなり。

ああ実に浅間しき親鸞であると慚愧をもって和讃をお止めなされてあります。我は名利に人師を好むものである。如来の仰せを名利のために使用せる者であり、如来の恵みを我物顔に盗める者である。されどかかる浅間しき

「そくばくの業を持ちける身にてありけるを、助けんとおぼしめし立ちける本願のかたじけなさよ」

とおよろこびなされたのが聖人の信仰の姿であります。云々。

（求道　第四巻　第一号）



盂蘭盆の感想

福島政雄

十八年前に、それまでに亡くなった父母や親戚知人のことを考えながら、盂蘭盆の感想を書きました。それを今あらためて「慈光」誌に掲載していただきますこと、有りがたく御礼申し上げます。

旧暦の七月十五日夜に私は妻にさそわれて近所の盆踊りを見に行った。それはいかにも東京らしい盆踊りであった矢倉を組んで上の段では太鼓の人が二人で二つの太鼓を打ち、下の段では十人ばかりの人々が踊り、矢倉のまわりの地面では老若男女沢山の人々が矢倉をまわりながら一せいに踊った。唄は東京音頭や、炭坑ぶし、奴さん踊りのふしなど私の知らないものが多かったが、威勢のいい愉快な踊りと唄とであって、見てきいているうちに私も大変に面白くなった。

併し此の踊りを見た最初の瞬間に、私の心には仏の浄土という感じが起った。かねては種々様々の生活の営みに追われている人々が、今晩は明月の光に照らされながら一緒に踊っている。このように仏のお浄土では一切の人々が恨みも嫉みも怒りも無くなって一つに融けて楽しい大活動に入るであろう。尽十方の無碍の光明に一味にしてという趣ですべての人々の心が融け合うて仏陀の御はたらきの中ではたらくであろう。こんなことを瞬間的に感じて私は何となく涙を催すような気分になった。

それから私は盂蘭盆経のことを考えた。目連尊者とその御母についてのあのお話をむしろ伝説として考えて見た。そして伝説にこもる真実ということを考えた。

神通第一の目連がもはや世に亡き母をたずね求めて餓鬼道に堕ちている母を発見したという伝説は何と言っても悲痛の伝説である。神通第一であるけれどもその母を救うことが出来ないというのは更に悲痛である。これは目連が自分の貪欲のすがたを餓鬼道にある母というすがたで自覚したのではないであろうか。あるいは自分の貪欲ゆえに母を餓鬼道に陥らせたという自覚であろう。人の子としてはたまらない痛切な自覚である。

此の事を釈尊に訴えた時、釈尊が目連に対しての御言葉

は何という厳しい御言葉であろう。天地の神々、如何なる威神力を以てしても汝の母は助からない。それほどに罪根が深く結ぼれていると仰せられる。此のお言葉をきいた目連は絶望の底に沈んだにちがいない。

絶望の底に沈むとき始めて久遠の光がさしてくる。釈尊の御口から七世の父母を祭れという御言葉が出る。衆僧の夏安居（げあんご）の結願の日、七月十五日に百味の飲食（おんじき）を供えて七世の父母を祭れと仰せられる。これは深い心の御言葉であるとおもう。

七世の父母を祭ることは仏陀の久遠の御慈悲を感ずる縁となる。御恩を久遠の深さにおいて感ずるのである。私などかねては浅薄な心で御恩ということも思わず、御仏前の勤行（ごんぎょう）も怠り勝で過している者が、盂蘭盆の時に先祖代々の位牌をお仏壇にならべてお供え物をして拝んでいると、釈尊が七世の父母を祭れと仰せられた御心持が何となくわかるように思う。同時に自分の餓鬼のすがたや地獄のすがたが見えて来る。父母世にありし日の自分のすがた、それが今更のように心眼に浮んで来る。自分というものがしみじみ淋しくなる。

この私をどこどこまでもお見棄てのない御慈悲とかねてきいている。久遠の慈悲の御仏、今は七世の父母を縁として此の私の上に慈悲の御光をそそぎ、知慧の御光を以て私のいのちの底の底まで照らしたもう。しみじみと淋しい私らお念仏称名が湧いて来る。

尽十方の無碍の光明、その光明につつまれて私の父母も祖父母も兄も妹も、世を去った長女と三女も私の心を照らすのみならず世を去ったなつかしい友人も知人も無碍の光明に一味になって私の心を照らす。盂蘭盆会はまことに心深いものである。先祖の先祖のそのまた先祖、私には忘れられている遠い先祖も私の心を深く照らす。それは仏陀の慈悲と智慧との光明である。

此のような思い出の中に私は今年もお盆の三日三夜を過ごす。陰暦との関係で月の照る夜は少し後になるかも知れぬ盆踊りも少し後になるかも知れない。併し十八年前に既に静かに考える私の心と勇ましい盆踊りとの間につながりが発見されている。

「それは目連尊者の御母が救われたよろこびの歌、歓喜の踊りである」と言った妻の声であった。

太鼓の音をききながら私はそのことをしんみりと考えたその心持は今日までも生きて続いている。お盆の十六日になるとお浄土の返照が夕焼けのように私の心を照らす。お念仏申す。私は静かに御仏前に立ちあがる。

（四十七、お盆会に）

道は邇きにあり

―小さきは小さきまま―

山本晋道

某新聞社の質問

先日、東京の某新聞社から、「目下の国家、社会、及び教団の諸問題について」所感を寄稿せよ、と云って来た。

私は困ってしまった。恥ずかしいが、私は不勉強で、そんな大きな問題について、人前に出せるような一家の識見を持ち合わせないのである。新聞や雑誌で、それぞれの方面の専門家の意見を読んで、何程か啓発されている位の程度であって、こんな大きな問題は全く私には手に及ばない。

ありのままにそう書いて断わろうかとも思ったが、何だかそれもおちつけずに数日をへた。そして、自分の無能力不勉強を、新聞社から叱られたように感じた。

国家の重きに任じ、社会の木鐸（もくたく）となり、教団の指導的地位に立って、日夜心を痛めて滅私奉公して居られる立派な方々のことを思うて、私は自分の土くれにひとしい生き方がさびしくあわれに思われるのであった。

× × ×

それから数日のある夕方、赤ん坊を抱き、上の子達をつれて、ふと草庵の裏手の丘を散歩した。あわただしく暮らして、庭先の花畑さえ心をとめてたのしむゆとりのない私には、実に久しぶりの散歩であった。

すると私はうれしいものを見付け出して、救われたようにほっとした。まだ八月の半ばというに、野菊が道の両側に咲き乱れているのである。私は子供の時からこの花が好きであった。草深い田舎に育った私には、自然が常によき友であった。殊に、やわやかな秋の頃、雑草の中にまじって、うす紫につつましく咲くこの花のひなびた姿が私は好きであった。

× × ×

散歩から帰って、私は葉書に次のような意味を認めて新聞社に送った。

「昨日、日暮れ方、久しぶりに裏の丘を散歩した。八月

も半ばというに、もう野菊が咲き乱れている。私は幼い時からこの花が好きである。つつましく、うすむらさきに、野の辺りに咲くこの花は、私にふさわしい生き方を教えてくれた心地がする。

田舎の小さい草の庵をあずかって、有縁の同信と交わりつつ、念仏往生の一路をたどっている私には、天下国家を論ずる力は全くない。しかしながら、つつましく咲く道の辺の野菊が、小さきまま、力一杯咲き出でることによって、そのまま大自然を荘厳している姿を見ると、私も救われたような心地になる。

私は私にふさわしく、尊いいのちをいただいて、力一杯自分にふさわしい生き方をさせていただこう。私の生涯は、おそらく一生田舎にうもれて、知る人もなく咲いては散りゆく野菊の花のようなことであろうが、それはそれでまたささやかながら、世を思い、国に報いる道になるのではあるまいか」

× × ×

○ 宗教にくるまで

以上は、答案としては落第である。質問には少しも答えていないから。しかしながら、これはこの質問に落第したことを縁として、私が喜ばせていただいた私の救いの心境である。この返事を出したあといろいろのことを思い浮かべてよろこんだ。

曽て、出世をあせって、花やかな夢に生きていた時代の私は、人生の価値についてこんな考え方は抱いていなかった。高い地位、人の評判、相当の収入、自分の抱く理想の心ゆくまでの実現、そこにのみ幸福があると思って、ひたむきに努力していた。私が受けた教育、私の育ってきた時代の雰囲気もまた、その方向にのみ動くことをすすめていた。誰も彼も、成功主義であった。えらくなれ、有名になれ、豊かになれ、権勢の地位につけ、そのためにしっかりやれと教えていた。今もそうである。いつまでも人間の大体の考え方はこうでしかないのであろう。「えらくなれ」「強くなれ」と教える人はあっても、「ありがたくなれ、やさしくなれ」と教える人はめったになかった。私は何時しか成功病に感染していた、有名病にとりつかれていた。拝金宗にかぶれていた。

だが、その方向に私の救われる道はなかった。私は青年学生時代に、私の幼稚な理想主義、倫理主義を、社会的実践に移してみて、忽ち手厳しい躓きの中におちた。世の中に出てからも、私の夢は次から次と崩れて行った。教育上の悩み、教員生活の不愉快さ、家庭のもつれ、愛児の死、天災、借財と、次々と私は手きびしく、ゆすられた。

人をうらやみ、自分の不幸をなげいてみるが、何ともしてみようがない。そして、一番苦しいことは、自分自身のつまらなさが、いやでも内から感じられて来ることであった。外側に描いている幻の消えていくのはまだ我慢も出来る。人に向って立腹するのはまだいいうちである。未来の夢がうすれてゆくのも仕方がない。しかし内側の、自分自身を相当なものと思っていたのが、現実に崩れてゆく位つらいことはない。自分が崩れて行くのである。自分のつまらなさが身にこたえてくるのである。腹一杯、まわりの人人にたたきつけてやりたい怒りが内に燃えているときも、その怒っている自分自身にも至らない所があるのでないかと一度気付くと、人に向かって食ってかかる元気がなくなってしまう。

こうして、私の悩みを解決する鍵は、先ず第一に私自身の中に見出されるはずだと思って、私は因縁熟して宗教の門をたたいた。沈痛に念仏しながら、しかも力強く九十年の生涯を生き抜かれた親鸞聖人の御心持を知りたくなったから。

幻を追うて

私がひたむきにその道一つに打ちこんでから、何時しか十年の月日が流れた。それで今日の私はほほえんで、其の頃のあせりなやんだ自分を、いたわしく思い出してお念仏申すことである。

仏教を聞いて以来、私は次のようなことを心からうなずかせて頂いたのである。

人の様になったら、自分が落ちつけると思っていた私の幸福に対する考え方が、全く幼稚であった。幸福とは、人の姿を外から見て、自分もあんなになったらさぞよかろうと、うらやましがっているときだけが幸福であって、現実に自分がそうなってみると、案外大したものではないことを、私は次々と体験した。

第一に私は帝大を出た、そのことを人に誇りたいというなさけない心は今も私の中に巣喰っていて、時々私をめんくらわすのであるが、さてその帝大で私は何を学び得たか。中味を人知れず反省すればまことに恥ずかしいことである。それは大学のまずさではなくて私の学生生活の懈怠であった罪としても、少くとも私にとって帝大生活それ自身がどれだけの価値があったか。又社会的にどれだけの尊敬に価したか、ここに先ず第一の幻滅が来た。

第二に私は若くして相当の地位につき俸給を得た。しかし果たしてそれが私を満足させたか。中学の教諭になった私は、専門学校の講師や教授に赴任した友人をうらやむ心を内に抱いていた。自分の労力や人物と彼等とを正しく評価するいとまもなく、唯やたらに腹が立った。収入の点では私は最初から相当高給で赴任した。しかし、私の月々の

生活はあまり余裕がなかった。私の暮らし方のまずさである。ここに地位や俸給についての第二の幻滅があった。

第三に私は家庭をもった。しかし、心のどかな幸福な生活は来なかった。いろいろとまわりのものを責めてみたがどうとも解決の道はなかった。ここに第三の幻滅があった。

学校でも思うような教育は出来なかった。同僚とも気まずいもつれに苦しんだ。こうして一通りの、世の人のねらう幸福がそろったのに、私の心は満たされず、たえず、不安であった。大学も出た、地位も出来た、収入もある、家庭も持った、子供も生まれた、しかし私のえがいていた幸福はやって来なかった。

私は今こそ、その原因がわかる。仏の教によれば人生にはまどかな幸福はないのである。悩みのともなわぬ幸福は存在しないのだ。外から見れば幸福で、何一つ足りないものの無いように見えている人も、その人の心の中に立ち入って見れば、みんな、悩みと不足は持っているのである。だから人をうらやみ、未来に夢をえがいて生きて行くことは危い、それは虹の美しさにだまされて無闇と走っているのであって、実際そこへ行って見ると虹は幻の如く消えてしまう。

「虹が消えて見ると広い曠野にただ一人淋しく自分がとりのこされている。この唯一人の自分もやがて消えて行く虹に過ぎない」

と言ったある人の言葉がはっきりと私にもわかる。

人間の考えている幸福は、人間の深い迷いが生み出した幻影であって、実在のものでない。完全な幸福は地上にはないのである。このことを自らの上にも思いあたり、人の身の上にも見届ける日がやってきて、私の成功熱はいくらかさがりかけてきた。

しかし、地上の幸福がいかに不完全であっても肉体を持つ私は、私の欲望を満たしたい。理想を持っ私は、やっぱり許されるだけこれを実現したい。そこで、夢だと聞いても、これを追わずに生きられぬ私であり、人のようになりたいとあせるこの心は何とも始末がつかぬ。

因果の鉄則

この点について、仏教は次の厳かな道理を私に教えてくれた。自因自果、他因他果の法則である。いくら人をうらやましがっても、人と私とは、業因業縁に差別があるから、従って同じような果はならぬというのである。幸せな人をうらむ心の起こるとき、今の私はこう思う。あの人達は、因縁がよくて、あんな生活に辿りつかれた。前世のよき因縁と、今世であの人達のまかれたよき因縁とが、今日の幸福の実を結んだのである、私もあんなになりたいもの

である。そのためには、私が努力してあの人々のような善き因縁を作るより外に道はない。然し、因縁の法則は、時間的にも三世に渡り、空間的にも十方に影響しあうのであるから、私自身のささやかな今生の努力一つで、果たして願う如き結果がくるかどうかは全くわからぬ。然し、私は力一杯正しい努力一つで、果たして願う如き結果がくるかどうかは全くわからぬ。然し、私は力一杯正しい努力を続けて見よう。そして、因縁あって、私に許されるだけの結果をつつましく頂いて生きて行こう。

こう思うとやたらに人ばかりをうらやましがってはならぬ。自分の不幸を人に向かって愚痴いっても始まらぬ。まいた種なら、つつましくうけとり、これからよき因をまくために一歩一歩努力する外はないと思う。

小さきは小さきまま

この生活態度がわかると共に、かかる生き方の中に限りなき尊き価値生活の許されてあることを私は知った。人のようにえらくなれなくてもいいのである。因縁がちがえば、桜は桜、牡丹は牡丹、菊は菊、蓮華は蓮華、あくまで自分らしく咲く外はない。然し、外の花の色や形をうらやむことはいらぬ。各々が、各々の色と形で咲きにおうまんま大自然は調和して美しく荘厳されるように、我々が各自の業縁を通じて、各々らしく生きるまんまで、法界は荘厳されるように、我々が各自各自の業縁を通じて、各々らしく生きるまんまで、法界は荘厳され、調和を保つのである。

人目について、高く秀でて咲きほこる桜の大樹もあるであろう。深い谷間の奥に、人知れず浄らかに咲き出でてはしぼんでゆく白百合の花もあろう。或は道の辺にふみにじられながらも、秋になって、可憐なうす紫の花をつける野菊のようなものもあろう。いずれもが美しい。何れもが大自然の美を織り成す尊い一要素である。

仏教は私にそんな生き方を教えてくれた。人をうらやむな、自分らしく生きてゆけ、人世の市場価値だけが人間の価値でない。どんな富貴な生活をしているものも、どんな貧賤な生活をしているものも、それらの人の生活の内に、聖なる生命が一つ流れ動いているならば、同じ尊い生活である。姿形の差はどうあろうとも、それらの人々は皆一様に法界の園に、美しく咲く花の一輪一輪である。差別の世に差別のまま生きながら、こんな絶対平等の生活をする道がある。

如来の御廻向の名号を聞信して生きる、信行生活とはそれである。信とは、かかる生命であり、念仏とは、この喜びがかなでる魂のリズムである。

小さきは小さきまま、大いなるは大いなるまま、如来の聖なるお光の中に、力一杯咲き出でることである。自分の

宿業を心しずかにうけとって、それを通じてお浄土まで、無碍に生き抜く生命を内につちかうことである。差別のまま、平等に、往生浄土の大道にあることを、心からよろこべる肩身の広い生き方を体得することである。最後まで地上の差別はなくならぬものを、ただ、人ばかりうらやんで空しき虹を追うて生きないことである。道は脚下にある。私は、私らしく生きさせていただくことである。そして、私のような、土くれの如き無価値の存在にも、とうとう如来のおまことは遂に宿って下さったことを心から感謝しながら、生き生きと自分の道を歩きたいことである。

人をうらやまず、自らの不幸をなげかず、人にもこびずひねくれもせず、小さきは小さきまま、わが生活は救われてあることをよろこびつつ、不退転の生命道を悠々と踏みしめて生きて行きたいことである。かかる生活の所有者になった時、仏教はこれを「生きている」と名付ける。然らざるかぎり、如何に人の世で富み且つ栄えていようとも、それは、やがて死と共に亡びてしまう迷いの生活でしかないのである。生存はしていても生活はしていないのである。

道は邇（ちか）きにあり

私は公職を辞して、専心求道生活に入って以来、世俗的の一切は一応失ってしまった。けれども、私は今喜んでくらしている。何となれば、私は今こそ生きていると、しみじみと感じるからである。

国家、社会と教団の刻下の諸問題に答える私のただ一つの道は、先ず、私が、本当に「生きる」ことが根本問題であると思う。本当に「生きる」ことを忘れた人間が、何と気の利いたことをしゃべってみても、やってみても、それは凡そ意味のないことになってしまうであろう。私は先ず「生きる」ことが出来た。この、生の歓喜と栄光を、いよいよ深く、わが身に体現する所から、私の人生活動の原動力が出てくると思う。どんな方面で、どんな事業に参加して人間の生涯が終るかは、時が自ら解決してくれるであろう。それは一人一人の因縁であって、あらかじめきめられる問題でもなく、又その必要もあるまい。唯、刻下の私にとって、何より大切なことは、私自身を常に「生き生きと生かしておく」ということであり、周囲の友にも、単なる生存に満足することなく、早く「生活の所有者」になれとよびかけること一つである。

道は常に邇（ちか）きにある。平凡な生活のまま、悠々と天地と共に生きる生き方がある。刹那に、永遠を生きる道がある。人をうらやむに当らない。自ら絶望することはない。いかにささやかな一生であろうとも、慈光の中に、合掌して、念仏の一道を辿るならば、人は皆平等絶対の価値ある生活者となりうるぞとは、祖師、親鸞聖人の示したまえる人類の救いである。

（昭和十三年八月二十一日）

念仏詩抄

木村無相

み名

み名の乳房に
そだてられ
われいま生きて
ナムアミダ
み名にしたしむ
身とはなれ

六十七の
身になれど
朝夕み名を
いただきつ
みおやにすがる
おさな児よ

ああ
み名

ご恩

み名
み名——

ああ
手のご恩
足のご恩
五体をあげて
みなご恩
一生お世話になりまする

煩悩具足の
わたしとて
いかいご苦労
かけまする
ああ
手のご恩
足のご恩

地獄

根性
根性
わたしの根性
この根性が
地獄をつくる

和上のお歌に
〃鬼を生む
親とてほかに
なかりけり
よくよくみれば
わが心かな――〃
（註、和上、江州源通寺、禿顕誠和上）

西方浄土

生の依るところ
西方浄土
死の帰するところ
西方浄土
生死の帰依所
西方浄土

阿弥陀経に
〃従是西方
過十万億仏土
有世界
名曰極楽――〃

わたしのムネに

〃西方弥陀の浄土から
至心の鳥が
飛んで来て
わたしのムネに
巣をかけて
ナムアミダ仏と
啼きまする〃

西方弥陀の
浄土から――

四六・一〇・六日

親鸞一人が為なりけり

花田正夫

お浄土は誰のためにおこされたか

聖人の常の仰には「弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずればひとえに親鸞一人がためなりけり、さればそくばくの業をもちける身にてありけるを助けんと思召したちける本願のかたじけなさよ」と、御述懐さうらいしことを……。

これが有名な聖人の常の仰せであります。阿弥陀仏のながいながい、五劫というあいだのご思案といい、兆戴永劫のあいだのご苦労というのも「よくよく案ずればひとえに親鸞一人がためなりけり」こう聖人がいつもくりかえしておよろこびになっていられました。

私共がご恩ということも、仏智をいただいてだんだんと知れはじめるのであります。御和讃に「信心の智慧にいりてこそ仏恩報ずる身とはなれ」とあります、その智慧は

智慧の念仏うることは　法蔵願力のなせるなり
信心の智慧なかりせば　いかでか涅槃をさとらまし

と、法蔵菩薩の願力の御蔭であります。聖人は、そのご恩の至極をつねに「弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずればひとえに親鸞一人がためなりけり」と、およろこびになられました。

先般、若い僧侶の方々の集いがありましたが、そのときお浄土のことを話しあいました。そこで最初に申上げたことは、これからお浄土のことをともに讃仰申すのでありますが〃一体お浄土は誰のためにおこされたのか〃ということをしっかり頂いておかねばなりません。ただお浄土を向うに眺めて、広大無辺の世界で、結構なところだと聞いてみても、それは見物だけに終ります。お浄土は報土で、本願に報いてあらわれた境涯であります。その本願はどうして建立せられたかと申せば

如来の作願をたずぬれば、苦悩の有情をすてずして
廻向を首としたまいて　大悲心をば成就せり

「苦悩の有情」あればこそ、ご本願がおこされました。ことばをかえていえば「生死の苦海にはてしなく流転する私」のためにおこされたのであります。わたくしが浄土に

まいらなければお浄土は空っぽであります。

私共がお浄土ばかりでなしに、一切の教法を学ぶのにまず根本に、仏さまの教法は一体誰のためにおこされたのかということをしっかり頂いておらないと、ひとごとに終り、見物におわるんじゃありますまいか。いまの聖人の常の仰せでいえば「親鸞一人がためなりけり」とあるのが肝心かなめのことであります。

歎異抄を読んで不審の問題

私は岡山県の田舎の真言宗の在家に生まれまして、医師になる積りで高等学校も理科に入りました。その郷里岡山は「備前法華、安芸門徒」というように真宗があまり流布していない、無仏に近い地方で育ちました。そこではじめにキリスト教を聞いて行詰り、一灯園に入っても行詰り、あれもこれも落第して、宿無し犬の様にウロヅイておりました私に、伯父から歎異抄を教えられて、はじめて親鸞聖人のおことばに触れました。そして心にしみるものがあり、七十近い今日まで本抄をはなすことが出来ず、これ一つに生活のすべての導きを頂いております。

しかし底のない深さと、はてしのない広さからあらわれた聖人のおことばにふれまして、色々の不審が起こりました。その一つで、聖人の常の仰せについて〃阿弥陀仏は十方衆生のためにご本願をおこされたのに、親鸞聖人は「親鸞一人がためなりけり」とどうして仰言るのであろうか〃と、こういうことが最初に不審になりました。

そこで私共の高等学校のドイツ語教授であって篤信な池山先生にお聞きしました。いろいろと懇切にお話下さったのでありますが、非常に感銘いたしましたのは次のお味いでありました。

ある日先生が、

久遠このかた子ゆえの廻向
わたし一人をかたおもい

という都々逸調の唄を示されまして、どうです、この中に都々逸の出来る人はこれをやって御覧と云われました。そして念仏裡に語られましたことは、

「次男が肋骨カリエスで大手術をしたのでその夜病床で看護していた。その時フト気着いたのは、普段のん気な父さんで、こんなことで親としての資格があるのかとあやぶんでいたのに、子供が口に出して要るという前に知らぬまにそれを用意している自分に驚いた。そして私でも親らしいところもあるんだな、と思う下から、親と子は二っであって一つだということがわかった、子に要ることが親に要ることになる。そして今はこの病む子のうえについてであるが、それはどの子に対しても同じである。長男がどうあっても、三男がどうあってもみな同じ

である。五人あるから一人ぐらいは……そういうものではない、一人一人がかけがえがないのだ、つまり親の心の全分が一人一人にかかりはてていると知らされて、十方衆生を救い遂げようとされる阿弥陀仏の大悲心は、十把一からげに一切衆生が可愛いと仰言るのでなく、一人一人が可愛いのだ、一人一人がかけがえがないのだ。聖人はその大悲心を御身にうけられて、何の理屈もなしに氷に触れると冷たい、火にあたると熱いというように、一人がためであるから一人がためと受けとられた」と言われました。全く理屈なしで「義なきを義とす」、「一人がためなりけり」と信受されたのだなあと愚鈍な私もうなづきました。

親の念力——理屈をはなれた事実

その後、私は結婚しましたが子供がありません。それについて、池山先生は五人の親であって、その一人一人がかけがえのないと仰言ったが、そうだろう、それに違いないとは思いますものの、子の無い私には冷暖自知することができません。そうだろう、それに違いないと思いますけれども、そうだとなれないのであります。信の旅で、こういうことが非常に大切なのではないでしょうか。

そこで先生は五人の子がある、そして一人一人がかけがえがないと仰言るけれど、私には子がない、世間によく「子を持って知る親の恩」といいますが、子のない私にはその心がわかりません。先生の仰言ることはその通りだとは思いますが「その通りです」と頷ずけないのであります。ここでハタと行き詰りました。そうこうしていますうちにフト気付きましたのは、私に兄弟十人おりましたが当時五人のこつておりました—今では三人になりましたが—自分に子はないが五人の兄弟がある。その私が母に向う時、五分の一の母とは思えない、私一人の母であります。兄が二人、弟が二人おりましたが、それが邪魔にならないで、私の母であります。これは、そう思えと云われて思ったのではなく、自然にそうなっているのであります。そこで振り返りましたときに「ああそうか」と、大いに知らされましたのは、私一人の母になって五分の一の母とならないのは私一人をかけがえのないものとして、親の心が絶えず注がれていたので自然にそう思えるようになったということであります。点滴岩をも穿つと申しますが、絶えずおちてくる水の力で堅い石に穴があくようにて私は親の心子知らずでありますけれど、そうした不孝者の私に絶えずそそがれる親の念力の自然のもよおしのお蔭でありました。振り返りますと、あの時にも、この時にもと、私にかかりはてくれた母の面影がありありと浮かぶのであります。

いま阿弥陀仏のご苦労を、親鸞一人がためと仰がれるの

も、阿弥陀仏がながい〳〵間「一人がため」にかかりはてくださるからであります。私共は鈍感無智な忘恩者で、そんなこともあったかなあぐらいでぼんやりして、仏様を後に廻しておりますけれど、仏様は、私共が後に廻そうが前に廻そうが、右に行けば右、左に行けば左とかかりはて下さる、五劫思惟のご苦労があればこそと頷ずかされます、そして聖人の信の基盤がそこにあったのであります。

さて、ここでいま一つ申し添えますことは、私は母に対して私一人の母と思いますが、それは他の兄弟から母を独占したのではありません、兄は兄、弟は弟でそれぞれに自分ひとりの母と思っています。そのように十方の衆生の一人一人がそれぞれに私一人の如来と頂きますが、他の者は駄目だと、如来を私しするのではありません。そこで「親鸞一人がため」と仰言るまんまが「私一人がため」なのであります。それは私共がそう思うとか思えぬを超えた、如来の大悲心、衆生苦悩我苦悩、衆生安楽我安楽の、全分のみこころで向って下さる、一人一人をかけがえのないものとしてご苦労下さる事実そのままであります。

同座して下さる聖人—煩悩成就の私

私共は内に八万四千の煩悩をもって居りますから、縁次第でどんな狂態をやらかすかわかったものではありません。「さるべき業縁の催せば如何なる振舞もすべし」と聖人が仰言る通りであります。新聞などに、親子心中したの、いや強盗殺人だの、或は知名人が破廉恥罪を犯したの、川端康成さんが自殺したの等々、色々の問題が報道されます。併しながらそれらは残らず私自身が縁にふれて織りなす絵巻物であります。煩悩成就の凡夫であります。煩悩成就ということは、丁度芝居の花道に用意万端ととのえて役者が控えているようなものです、合図一つですぐ飛び出すようなもので、煩悩が万事用意されているので、これはしまったと思うのは後のまつり、今度は愚痴云うまいと思う下からその縁にふれると出てくるのであります。ことに拘置所で死刑囚の人にもあいましたが、私は今日は見舞いに来ているが私も同じ縁にふれたら同じ罪を犯す煩悩成就の人間で、現在その業縁にふれないからそうしないだけです。罪に対する免疫性がない身には、どうなりますことやら

「さるべき業縁の催せば如何なる振舞もすべしとこそ聖人は仰せさうらいし」

こう仰言る聖人は、この地上のあらゆる罪業を、わがこととして見て下さる〃無理ないことだ。お前としてはそれよりほかにないのだ〃と、罪業の私の身の中、心の中に入り込んで下さるのであります、だから、この地上に一人でも救われない者があるならば、聖人御自身が救われないのであります。この聖人は、地上でおこり得るあらゆる罪業

を理解し、ことに隣れみ摂取して下さる方であります。是非善悪の相対差別のきびしい世にあって、絶対無碍の如来大悲のみこころが聖人の仰せの中に自然にほとばしっています。そこに善人は善煩悩にしばられ、悪人は悪煩悩に苦しみ、若者には若者の悩み、老人には老苦がまとうけれど、こう仰言る聖人は、いつも真実の理解者として何処までも同座して下さるのであります。

さて、そういう味わいから「弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずればひとえに親鸞一人がためなりけり」の常の仰せがそのまま私たち一人一人のためと頂けるのであります。

聖人はそう仰言っても、自分はとてもそう思えない、それでは聖人はお淋しいでありましょう。聖人のお言葉通り、私一人のためでした、と信知させて頂くとき、

一人居て喜ばば二人と思うべし
二人居て喜ばば三人と思うべし
その一人は親鸞なり。

と、よろこんで下さる聖人がそこにあらわれて下さるのであります。

さればそくばくの業を持ちける身

さて、聖人は、この味いを何処でお味わい下さったかというと、次の仰せでうかがうことが出来ます。

「さればそくばくの業をもちける身にてありけるを、助けんと思召したちける本願のかたじけなさよ」

聖人は、一人がための弥陀仏の御苦労を、われとわが身にあきれ果てる罪業の中に、たすけんと思召したちける本願を渇仰せられています、ここがまた私には非常に心うたれますのであります。きれいなところ、善いところでお会いするのは他人です。生みの親が娘の家を訪うと、ああお母さんがと云って、掃除も何もいらない、一番乱雑にしている居間へ来て、座布団まで自分で出して座る、これが親の姿であります。一寸お待ち下さいと云って、きれいにして迎えるのは他人です。これというのも他人は悪いところを見るとそしり、呆れるのでありますが、娘の長所も欠点もよく知って、どうあろうとも娘の身になって下さる。だから子供はありのまんまくつろいで親を迎えることが出来ます。いま私共が阿弥陀仏にお会いする場所は、きれいなところでなく「さればそくばくの業をもちける身にてありけるをたすけんと思召し立って下さる」御本願のまことにふれるのであります。

唯円大徳も、善導大師の金言「自身は現にこれ罪悪生死の凡夫、曠劫よりこのかた常に沈み常に流転して出離の縁あることなき身と知れ」と、聖人の仰せは全く一味であると述べておられます。維摩経の中に、泥田の中に蓮華の花

は開く、高原の陸地に蓮の花は咲かないと、煩悩の泥田の中に仏心の蓮華は開くとあります。紀州の妙好人の徳本さんは、

愚痴阿弥陀　貪欲阿弥陀　瞋恚阿弥陀
阿弥陀仏々　阿弥陀仏々

と喜んでいたと伝えられます。貪欲や愚痴や瞋恚と阿弥陀仏は離れていられないことを喜んだ歌であります。ともしますと、貪、瞋、痴の煩悩をきれいにして仏を迎えようとするのは、他人仏にしたことで、まことに申しわけのないことであります。

ご恩ということ――私の都合を超えた世界

さて、御恩ということも、われとわが身にあきれはてる罪業の身、このたすかるべからざる身に注がれる弥陀仏の真実心のしみこむところに自然に〃有難いなあ…〃と云わずにおれないのであります。

で、その御恩を私は二つに分けて頂いております、一つには、自分に勝手のいいことをご恩とよろこぶよろこび方であります。これでは真のご恩とは申せません、自分が好きなものを貰って、ありがとうという、自分の煩悩の満足するものを与えられて、ご恩だと喜んでいるのでは不十分であります。なぜかと云えばその反対に自分に嫌いなもの都合の悪いものを貰うとすぐ不足を云うからです。ことに私のように、形ばかりでありますが法衣を着せて頂いておりますと、皆様から色々なものを頂戴しますについて、物を頂くのではなく心を頂かねばなりませんのに、物ばかりに目をつけて思召を頂くことがなかなかむつかしいのであります、物質にめしいた身を何時も省みさせられるのであります。これでは自分の都合のよいことを喜んでいるだけで、ご恩とは申せません。

それについて、信友の西元宗助さんが、ソ連で抑留生活を終えて帰られた時、話して下さったことを思い出します。西元さんは京大を卒えて鹿児島師範の先生になっていられたが、福島先生のお招きで、満州の建国大学の教授になられました。その時、西元さんのお母さんが「お前は福島先生に重々御恩をうけているのだから、部屋に先生のお写真をかけて、足を向けて寝たらばちがあたるよ」と云われ、西元さんもその通りだと有難く思っていた。そして赴任して間もなく日本が敗戦となり、西元さんは妻子と引き裂かれて、牛馬同様に貨車に乗せられてシベリヤに送られる身になられた。その貨車の中で一番御恩になった福島先生が一番うらめしくなった。先生から招かれなければこんな破目に会わなかったのにと。足を向けたらばちを蒙るとまで思った身が、ガラッと崩れてしまった。ソ連から無事に帰れるか、殺されるか、妻子はどうして行くだろうかな

どと心は無茶苦茶に乱れ、絶望の底に立った時、フト気付くとお念仏が出て下さっていた。その時、自分の都合次第で恩人をさえ憎み呪う身とはなれたまわぬ阿弥陀仏のみ心にふれて、念仏がとめどなく出て下さる、そして一声一声に暗い心にひかりが射して、ありがたいナムアミダブツと感佩させられた由であります。

私はこのことを私自身にふかく感銘させられております。歎異抄の第九章にも唯円大徳が「念仏申し候えども踊躍歓喜のこころおろそかに候こと、また急ぎ浄土へまいりたき心の候わぬは如何にて候べきことにて候らん」と聖人におたずね申した時、

「親鸞もこの不審ありつるに唯円房おなじこころにてありけり」

と聖人は唯円房と同座されて

「しかるに仏かねてしろしめして煩悩具足の凡夫（いずれの行にても生死をはなるることあるべからざる）と仰せられたることなれば、他力の悲願はかくの如きの我等がためなりけりと知られて、いよいよたのもしくおぼゆるなり」

と本願の意趣を渇仰していられるのであります。御恩を本当によろこぶこころもなく、み親の国、浄土に急ぎまいりたい心もない、娑婆執着の強い私共は、かねてしろしめし、ことに憐みたもう大悲の御手のたのもしさ一つに支えられて浄土への旅を辿らせて頂くばかりであります。

ここに、別府の妙好人、安波勲八医師の辞世のことば

「仏の慈悲をありがたく思える様になったことがありがたいのではない。ありがたく思えぬ奴を相変らずお相手下さることがありがたいことである

大正十五年八月　聞名院　釈正信書」

を誌して結びといたしましょう。

（大山寺教会にて）

お　わ　び

八月の日曜例会を休み酷暑を避けさせて頂きましたが、九月三日の第一日曜は能登川町の仏教会に出かけますので休ませて頂きます。

名古屋の文人、横井也有の句

蟬あつし松きらばやと思うまで

と、芭蕉の句

しずかさや岩にしみ入る蟬の声

蓬戸を閉じて、草庵に思い併せております。

あとがき

原爆記念の月を迎えましたが、今年はじめて、中共やソ連との長い間の凍結もとけはじめ、平和への光りがさしそめましたことは、近来にない朗報であります。しかしまた日本人の一人一人が大きな自覚を持たねばならぬ年となりました。

先日、東京の癌研の所長、吉田富三さんが「私の母は八十四で亡くなりましたが、晩年には歯が一本になってしまった。そこで入歯をすすめると、母曰く、人の身体は歯ばかりが衰えるのでない胃腸もその通りであるから、歯なしの口で食べられるものを食べていると胃腸の負担になるまい。わたしはこれでいいのですと答えたのでかえす言葉もなかった。それにつけて、皆がそうするからというのでなく、自分の道をひらきなおって守る心を母から教えられた」と話された。眼前の利害得失にのみ迷わされず、世間の流行に雷同せぬ、わが道をひらき守る人が現在の日本に必要なのではありますまいか。

又七月の第三日曜に池山寿夫先生が「父のことども」の題でお話下さったのですが、その終りに「或西洋の学者が日本人はのこらず腕時計を持っているのに驚いたが、それ以上に日本人の時間をまもらぬのに驚いた」という警句を引用された。時計は時をまもるためのものであるのに、只装飾になっている文化は、猿が自転車に乗って文化人に組みしたとほこるのに等しい恥ずかしいことであります。

暑さの去り難い只今、心胆を冷やすような警句を申上げました。これはまず私自身が一番に省みさせていただかなばならぬことどもであります。

× × × × × ×

近角先生の慚愧心と無慚無愧のお味わいは、人間の底をついてのお話であります。私はかねがね、愚禿の心は内は愚にして外は賢なりの聖人の御悲歎の声に、この世界で聞くことの出来ぬ、人心の底を教えられますが先生のお味わいも同様な教えと頂き、私の全身心がそこにおさめられ「聖人様、私もその通りであります」と同心、同融せしめられますことであります。

御案内

○ 毎月第一、二、三日曜、午后一時半、日曜例会。
但し九月三日は休講いたします。
市電、新郊通り一丁目下車、東入ル。

○ 毎月二十四、午前午后、教西寺法話会。
市電、御器所通り下車。
市バス、北山下車。

定価　半年　四〇〇円（送共）
　　一年　八〇〇円（送共）

名古屋市南区駈上町二ノ八八
編集・発行人　花田正夫
電話八二一局七〇三七番

愛知県西加茂郡三好町大字福谷
印刷人　吉野穂志郎

名古屋市南区駈上町二ノ八八
発行所　慈光社
振替口座名古屋一〇四七〇番
郵便番号四五七

慈光　第二十四巻　第八号　昭和四十七年八月十五日発行（毎月一回・十五日発行）
昭和二十四年七月二十三日　第三種郵便物認可